

学びの風便り

リーディングスクール通信 23 R6.6.30

発行：松本市教育委員会 教育研修センター

第1回 リーディングスクール・ラボ

6月13日（木）第1回リーディングスクール・ラボが教育文化センターを会場に開催されました。

当日は、リーディングスクール、パイオニアスクール、アソシエイト校をはじめ、一般の学校や教育行政関係から、合計60人以上が参加され、4つの分散会に分かれて各実践校の発表を聴き、質疑・協議を行いました。

今年も確かな一歩を踏み出しました！ ～ 熱のこもった実践報告・協議 ～

リーディングスクール・ラボは、昨年度から取組んでいる13の実践校が2年目の歩みを、今年から加わったアソシエイト校6校が学校づくりのスタートから2か月の歩みを、プレゼンテーションを用いながら報告し、それに対して質疑・協議を行う、という形で進められました。



各学校からの発表では、これまでの歩みの中で、昨年度から積み重ねた実践をブラッシュアップし再スタートを切った様子や4月から小さな歩みながらも確かに動き始めた学校の様子などが活き活きと報告されました。

今回は、各校の発表を12分程度とし、残りの7分程度を協議の時間としました。協議では、最初に質問を受け、その後、

参加者それぞれが「感じたこと・考えたこと・アイディア・アドバイス・聴きたいこと・わからないこと」を付箋に書き、4人グループになり、付箋をA3の用紙に貼りながら、自分の考えを語るという形式で行いました。参加者一人一人が、発表を自分事としてとらえ、自分の思いを付箋に書きとめ、それをもとに語り合うなど、熱心に協議いただき、どの会場からも発表される先生方と協議される先生方の「熱」が伝わってきました。リーディングスクール事業も2年目を迎え、「子どもが主人公」となる学びへの動きが確かに根付きはじめていることを共有する機会となりました。



〈参加者のみなさんの感想から〉

とても学びの多い時間であつという間でした。たくさんのフィードバックをいただき、これからまたがんばっていこうと思いました。

全ての学校で、まずは教師自身が意識を変えていかないといけない、と発表していたことが印象的でした。本校でも研究主任を中心に職員研修を継続的にを行い、自分たちの意識改革を進めようとしているところですが、市全体でそのような方向に向かっているということを知ることができました。

付箋があつたことで、昨年のラボの時よりも、意見がやすく、話がしやすくなりました。時間も、あつという間でした。

自分の学校にいるだけではなかなか知ることができない他校の先生方の取り組みを知ることができ、とても有意義な時間でした。他校の先生方も私たちと同じ悩み、同じ願いをもって様々な視点から取り組みを行っていることを感じられ、たくさんの仲間がそれぞれの場所でアクションを起こしていることがとても心強く感じられました。私自身も松本市内の先生方と一緒に精一杯精進していきたいと思います。

総合的な学習を主軸に「探究の学び」に取り組んでいる実践で、変わっていく先生方の様子をお聞きし、「先生方のコミュニケーション」が、先生方を変えたのかなあ、と感じました。「話すこと」「語り合うこと」の大切さを感じました。

今回印象に残ったことは、多くの学校が「心理的安全性」を大切にされていたことでした。4月でメンバーが変わり、忙しい中で、なんとか協力をしてやっていこうと足並みをそろえることが大切だと感じました。職員が互いに理解をし合い、安心感があることで、スタートがきれると感じたので、今の時期は、職員の関係性の基礎作りの時期なのだと分かりました。

特集:学びの改革のあゆみ 開智小学校(学びの改革パイオニア校)



子どもに委ねる探究～チーム開智は主体的で協働的な校内研究を進めます～

パイオニア校2年目の開智小学校では、前年度の研究をふりかえると、次のことが見えてきました。“教師が準備をして、情報の整理の仕方を教えてしまう”“教師主導の総合になっている”

“「自分たちでやってみよう」と言っているけれど、教師がお膳立てしてしまっている”などと、教師が良かれと思ってやっていることが、子どもの主体性を奪ってしまっていることに気づきました。そこで、今年度は『子どもに委ねる探究』をテーマとして動き出しました。

探究コーディネーターの江口先生は、昨年度ずっと悩んでいました。探究を進めるためにはどうしたらいいのか。先生たちが探究のサイクルを回せる仕組みはどうあるべきか。探究を開智らしいものにするにはどうしたらいいか。ほかの学校は進んでいるのに……。などと、コーディネーターとしての使命を果たそうと、必死でした。ですので、今年度『子どもに委ねる探究』をテーマとしたときも、何をどう進めたらいいか、先生たちとどうつくっていったらいいのかと考えていました。その江口先生が、先日お会いすると、とてもいきいきと笑顔いっぱい、開智小の今を語ってくれました。

これまで探究コーディネーターとして何とかしようとしていた江口先生でしたが、自分のあり方を問い直したとき「自分が見切り発車しているのではないか。先生方と同じ土台でスタートしたいと考えているのに、同じ土台にいない。先生たちと語り合えていない。」ということに気づいたそうです。そこで、研究テーマである「子どもに委ねる」とはどういうことかについて話し合いの場を設定しました。先生の内にある考えを出し合っていくと、共通認識として「教師主導の探究活動になってはならない」と確認したそうです。ある先生は「伴走者である私たちは、環境設定（子どもが自己決定できるような場の設定）、教材研究（子ども達は、どんなことに引っかかりをもち、どのようなことを悩むのか）、授業設計（どんな力をつけさせるか、そのために何が必要か【人・もの・こと】）をしっかりと考える必要がある。」とふり返り、これからの探究活動を子どもが主体的に学んでいける場づくりを工夫しようと意欲的になったようです。

また、探究の研究を伴走する先生方で相談する場も増え、より先生方のニーズに合った校内研修が設計されるようになったそうです。結果として、チューニング（風越学園から昨年度教えてもらった単元構想にかかわるディスカッション）の仕方も、開智バージョンとして打ち出し、先生方が求める内容に近づいていきました。



“探究コーディネーターだから”と何とかしなければと頑張っていた江口先生ですが、今「自分を開き、同僚と語り合うことを通して、本当の意味で共通の研究テーマがすわった」と振り返られます。「みんなでアイデアを出して決めたテーマだから、先生方一人一人もそのテーマを意識し、変わろうとしている姿があります。誰か一人の先生に任せるのではなく、みんなでその場で子どもの情報を共有しながら作っている、その雰囲気楽しい。」と江口先生は語られます。

『教師の学びと子どもの学びは相似形』と言われる今。開智小学校の先生方の主体的で協働的な研究は、きっと子どもたちが主人公となる学びにつながっていくことでしょう。